滋賀文化財だより
NO. 212
1995. 5. 25
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

233. 海外研修参加記
北京・西安の遺址と文物(後編)

1. 西安近郊[11月6日(日)]

秦始皇帝陵兵馬俑博物館

西安市から東へバスで1時間余り走ったところにこれまで見られなかった山並が見えて来る。驪山(りざん)である。山上に立てば西安の北部を流れる渭河(いが)を見渡すことができる軍事的な要衝である。さらに30分ほど進むと秦始皇陵が見えてくる。

『史記』によれば、秦始皇帝が即位すると直ちに陵の造営にかかり、統一後全国から集めた囚人70万人が動員され、三層の水脈を掘り抜いた地下には銅板が敷かれ、人工の池には水銀をたたえ、人魚の油の灯火で明かりを取り、墓泥棒に対しては弩機(どき)で防御した地下の大宮殿を造ったことが記されている。

地下宮殿の上は土を固めた墳丘で守られ、現在はやや崩れているが、基底部が485×515mの方形の壮大な陵である。この陵墓の周辺は、1962年以降徐々に調査が実施され、陪葬墓・囚人墓・厩坑・銅車馬坑、そして兵馬俑坑の存在が確認された。

秦始皇帝陵兵馬俑博物館は、始皇帝の東方約1.5kmの地点に位置する。兵馬俑は朝廷の親衛軍を模して製作された8,000体を越える陶製の人形群である。これまでに三つの坑が確認されており、このうち、最初に調査された1号坑が最大で東西約210m、南北約62mの規模を有し、等身大の陶俑陶馬が6,000体余り、戦車約40輌が並べていたとされる。3号坑は、指揮本部と目される特別な構造を持った小坑である。2号坑は歩兵、騎兵、戦車の混成で軍陣が構成されたようである。

この2号坑に大規模な覆屋を設置し、1994年3月より発掘調査が開始され、10月からは館内を公開して、調査状況を観客に見せるという試みを行っている。また、残土の搬出にはベルトコンベヤーを使用するなど、新しい調査手法の導入がなされている。

案内と説明は、秦始皇帝陵兵馬俑博物館・呉副館長、張副研究員、張副主任の方々にお世話になった。発掘調査はまず俑坑の構造木材の柵木の検出から始まり、現在は弩兵や騎兵の発掘が進められているとのことである。柵木は最大65cmの直径の松および柏で、完成直後の放火で焼失した部分もみられた。また、2号坑東側の門道には轍が残っており、戦車を坑内に運び入れたときの跡との説明があった。

新築の2号坑の露出展示施設については、同博物館の保存担当である周鉄工程師にいくつかの質問をしてみた。兵馬俑博物館の職員体制については、考古学芸が5人、保存修復担当が7人という説明であった。

秦始皇帝陵兵馬俑博物館にて

遺構の状況の説明では、土層やトレンチに白いものが見えることについて、周氏は地下水からの析出物の塩類でとくに問題はないとのことであった。また、展示施設の温度湿度の管理については、温度21°C、相対湿度80%で展示施設の換気装置を3台設置しているが現在はまだ使用していないとのこと。これは発掘調査の進捗とも関連することで、やや湿度が高い点は遺構の乾燥対策の観点からであろう。

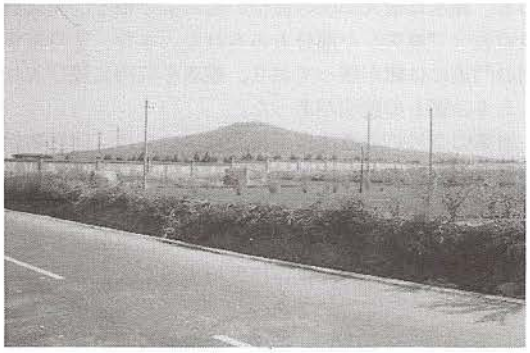
兵馬俑の破片の修理について、

2液性のエポキシ系接着剤を使用し、欠損部は石膏を充填しているとのことであった。

また展示施設の窓はできる限り小さく取っているようで、窓ガラスの色が茶色であることについては、とくに紫外線対策のガラスではないとのことであった。2号坑の展示施設の天井はやや低く人工照明での展示、発掘調査が可能で、さらにレールが縦横に走り写真撮影や実測の便宜が計られた設計であった。全体の展示施設について、従来からの1号坑展示施設は1970年代のレベルで、2号坑の新築の展示施設は90年代のレベルであると呉副館長からの至極明解な説明がなされた。

兵馬俑博物館に併設されている、秦俑博物館では、始皇陵の陵園の発掘調査で新たに発見された文物の展示が行われていた。陵園東の陪葬墓からは、手足が切断されたり銅鏃の刺さった頭骨など男女7人の遺骸が見つかり、副葬品など関係資料から秦始皇帝の子女との推測がなされている。こうした大規模な秦皇帝陵およびその周辺施設は、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産リストに収録されている。

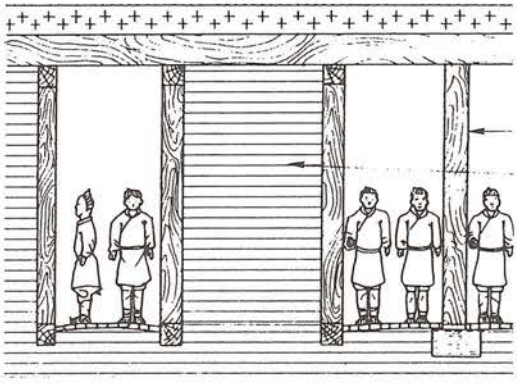
それにしても遙かに佇立（ちょりつ）する兵馬俑群の偉容を前にすれば、ただ絶句するよりなすすべを知らない。始皇帝陵はもとより、この陵墓をとりまく関連遺構についても未知の部分が多く、周辺のボーリング調査によって毎年といっていいほど新しい調査報告がなされてい



秦始皇帝陵

兵馬俑博物館・1号坑展示施設

兵馬俑博物館・2号坑展示施設入口



兵馬俑坑構造物復元図

秦始皇帝像

る。一行は車窓に眺めて西安市内へと戻る。

陝西歴史博物館

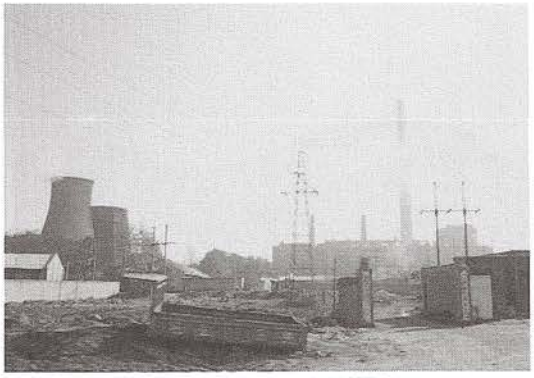
1991年にオープンしたばかりの陝西歴史博物館は、西安市の南郊大雁塔の近くに設けられている。唐代の建築様式を模した建物に最新の防火防犯システムや収蔵物の保存設備が導入された、地方では最大規模の歴史博物館である。展示内容も多岐にわたり、常設展示である陝西地方の古代史陳列のほか、唐墓壁画、唐俑、青銅器などの特別展示を見学することができる。展示の全体的な構成や各コーナーにおける展示品の配置、照明などはよく工夫が凝らされていて、見る者をして飽きさせない。各展示室を詳細に観覧するためには優に1日を要することと思われる。

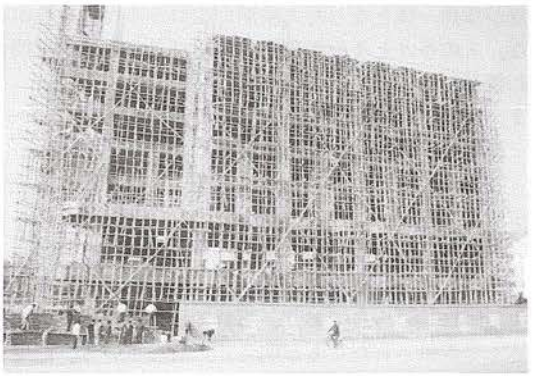
なお、ここで別の一班は西安市内の散策に出かけており、夕食時には話が弾んだことであった。それにしても団員の一向に衰えることのない食欲には驚くばかりである。

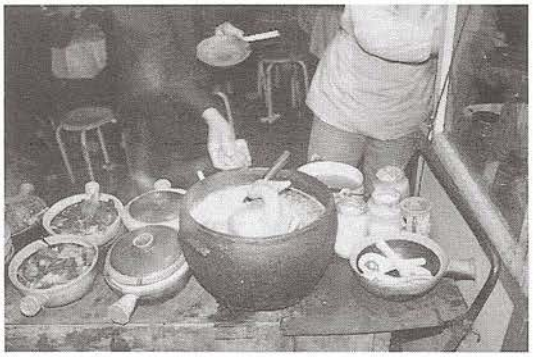
西安市内・近郊

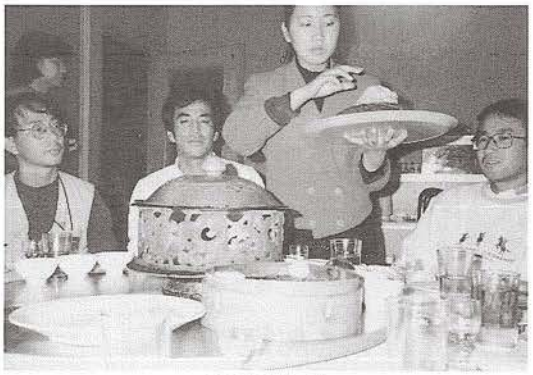
各遺跡や博物館の見学には専用バスを利用しての移動であったが、車中からは市街地のようすなどいろいろ見ることができた。とくに西安市の交通事情は決して良くない。交差点では歩く人、自転車、荷車、自動

西安市の交通事情


西安市郊外の火力発電所


ビル建築現場


西安市の屋台


餃子専門店

西安市郊外の民家

車が渾然一体となった大渋滞にぶつかる場合も多かった。人の多さとその活動するエネルギーに連日圧倒され続けた。

2．西安市・咸陽市周辺[11月7日(月)]

乾陵・永泰公主墓・茂陵博物館

この日は、朝のうちひとまず西安市街を離れ、咸陽市を経て乾陵へとバスは向かう。

乾陵は、陝西省乾県に営まれた唐の三代皇帝高宗とその皇后である則天武后の合葬墓である。墓室は、山腹の南に設けられており、石材で構築され鎔鉄を流し込んで封鎖されたことが明らかになっている。四周には墻垣が方形に巡らされており、各辺の中央には門が備えられ前面には陵寝建物群が立ち並んでいた。大参道の両脇には、石刻群が並んでいるが、唐代においてこうした石刻が置かれるのは乾陵以降とされる。

永泰公主墓は、乾陵の陪塚の一つである。永泰公主は、則天武后の孫で17歳で同武后より死を賜わったと言われ当初洛陽に葬られたが、武后の死後乾陵の陪葬墓の一つとして夫である武延基とともに合葬された。1960～62年に発掘調査が行われた。周辺には陵園を備え、高さ14mの墳丘を有している。墓室は、墓道・俑道・前室・後室から構成され、墓道の途中には6か所の天井を備え、全長は87.5cmを測る。墓道から墓室には、人物画を中心とする壁画が描かれている。傍らには、乾陵博物館が設けられ、永泰公主墓、章懐太子墓、懿徳太子墓から出土した遺物が展示されている。

茂陵博物館は、西漢の五代武帝劉徹の墓である茂陵を中心とする漢代陵墓群の遺跡博物館である。傍らには武帝の勇将である霍去病の墓があり、石人・石馬・馬踏匈奴・怪獣食羊・臥牛・伏虎・猪・蟾蜍・石魚などの石刻像が野外展示されている。同博物館見学後、茂陵の裾を通り抜けて、ふたたび西安市内へと戻る。

西安碑林博物館

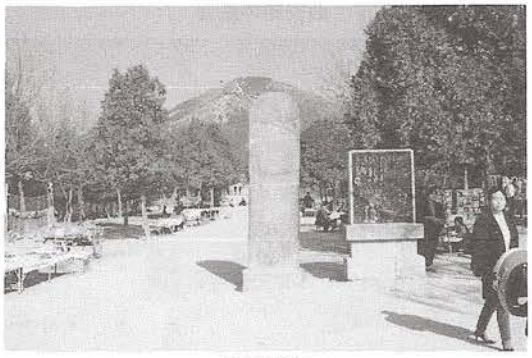
西安碑林博物館は、西安城南門の東にあり、西安孔廟・西安府学・西安碑林の三つの旧跡から成る。この碑林博物館は、以前陝西省博物館として有名であったが、現在は文字どおり石碑の専門博物館となっている。

七つの石碑陳列室、八つの碑亭と六つの碑廊があり漢代から清代に及ぶ1000点余りの石碑が展示されている。また石造佛の展示もなされており、特に北巍時代の石仏が有名である。採拓の墨の香を嗅げば、中国文字文化の神髄に触れた思いであった。

3．西安から北京へ[11月8日(火)]

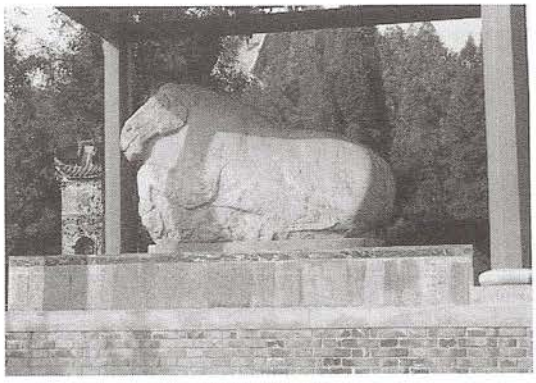
西北大学文博学院・陽陵

西安での研修の最終日であるこの日は、終始案内役を努めていただいた王建副教授の勤務先である西北大

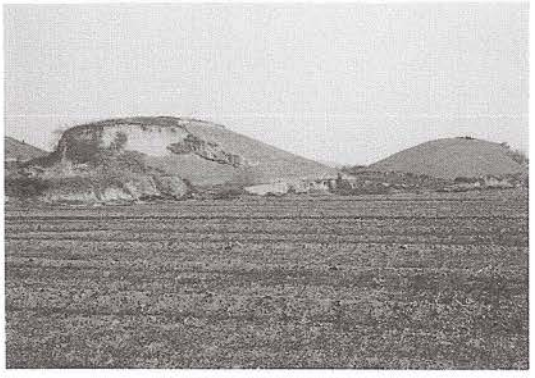


乾陵近景

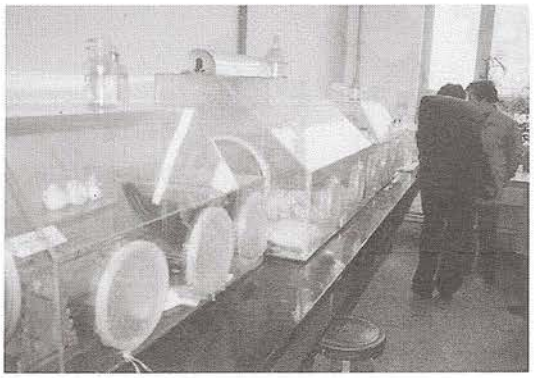
碑林博物館



霍去病墓石像



陽陵・門闕遺構



西北大学文博学院・保存科学研究室

賽克勒考古與藝術博物館

学文博学院を表敬訪問し、展示室を見学する。同学院を後にして空港へと向かう途中、陽陵に立ち寄る。漢の皇帝は戈陽県に寿陵を造営し、県名に因んで陽陵と呼ばれた。全体の平面形はほぼ正方形を呈し、底部は一辺約170m、頂部は一辺約50m、高さは、約31mを測る。東北約450mには、皇后陵が営まれている。四対の門闕遺構のうち、とくに東門、西門、南門の保存状態は良好である。陽陵へは近傍の村から田園の中を徒歩でたどりつき、さらには封土の頂上にまで登ることができた。博物館見学が比較的多きを占めた今回の研修で、何よりも最後に遺構の土を自らの足で直に踏みしめると言う、まさに考古学的原点に立つ貴重な体験であった。

西安14時40分発の中国西北航空機に搭乗し、16時過ぎに再び北京に到着した。夜は、北海公園内において方膳料理で答礼の宴が行われた。

4．再び北京そして帰国の途へ

賽克勒（サックラー）考古與藝術博物館

今回の研修旅行における最後の訪問先は、北京大学賽克勒（サックラー）考古與藝術博物館である。この博物館は、北京大学とアメリカのサックラー財団の共同運営になるもので、故サックラー博士の献身的な援助で1992年に開館した新しい博物館である。展示品および収蔵品として、石器時代から明清時代にいたる中国歴代の考古学研究標本が収集されている。案内は、北京大学・蘇哲助教授にお願いした。

本館には、近年の北京大学関係の発掘調査成果を中心とした、旧石器時代から明清時代にいたる多くの文物が展示されている。仰韶文化期の彩色土器の同じコーナーに石皿、石杵、さらに彩色に用いられたと思われる赤色顔料の展示がなされていた。また、西周期の青銅製品の優品も多く展示されていた。新設の博物館だけあって展示環境は非常に良く、青銅製品のケースにはコンパクトな温湿度計が個々に設置されており、照明も効果的で大変見やすい配慮がなされていた。先に訪れた西安市の陝西歴史博物館と並ぶ、最も近代的かつ大規模な歴史博物館の一つである。

今回の研修旅行もこれで最後の日程を終えることとなり、遙かなる蒼穹（そうきゅう）と大地に名残を惜しみつつ北京空港から関西国際空港へと無事たどり着くことができた。

5．研修を終えて

わずか7泊8日の研修期間であったが、北京および西安近郊の著名な遺跡や博物館のいくつかを目のあたりにすることができた。そこで見たものは、中国文明の偉容を知るに足る、雄大な陵墓や宮殿址、さらには技術の清緻を窮めた文物の数々であった。もとよりこれだけで中国の歴史を理解するには程遠いが、その深遠さの一端でも垣間見ることができたのは幸いであった。広大な陵墓、宮殿の保存整備や遺構展示型の博物館に見られる中国の文化財保護施策のあり方には、ある種の羨望を感じざるを得ない。

また、空前の経済発展を遂げつつある中国では、とりわけ都市部における再開発の波が加速度を増しつつあるものと見られ、重複する遺跡の保護策が眼前の重要課題となっているようである。わが国とは国情が異なり、国民の遺跡に対する意識にも大きな懸隔が介在するものと思われるが、行政面や技術面で相互に交流を深める余地は少なくないものと思われる。

今回の研修の成果を充分に咀嚼して、平素の調査業務の糧とすることはにわかには困難であろうが、彼我の考古学研究と文化財保護行政の発展、さらには日中友好のために微力を尽くす契機となれば所期の目的の一端は達せられたものと思う。

研修にあったっては、中国社会科学院考古学研究所、西北大学文博学院をはじめ各関係機関の諸先生には、並々ならぬご厚意をいただくことができた。文末ながら記して深謝いたします。

（中川　正人・田路　正幸）

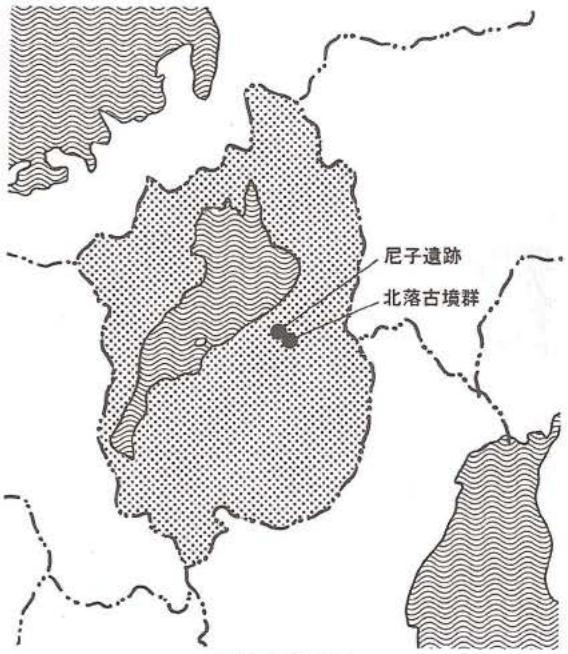
234. 北落古墳群出土の浮線網状文土器について

北落古墳群は犬上郡甲良町にあり、犬上川左岸扇状地に立地している。当古墳群は後期の古墳群として周知されていたものの、その実態については不明な点が多かった。しかし、近年の調査結果により埋没していた古墳が発掘され①、石室の形態や古墳群の構成・範囲などがある程度確認されたほか、古墳以外には縄文時代から中世にかけての遺構も数多く存在することが確認されている。とりわけ縄文時代の遺物の多くは埋没古墳の周溝から出土している②。これは古墳の築造時に生活跡が壊され、周囲に散逸していた遺物が周溝内に再堆積した状況であり、遺物の層位的関係は全く求められない。けれども、遺物の特徴は当遺跡周辺の縄文時代の状況を物語るものである。筆者は平成4年度に当遺跡の調査の一部を任され、翌年報告を行なったが②、浮線網状文土器の破片を一点報告することを怠っていたことがわかった③。そこで今回この誌面を借りて報告し、担当者としてその責を果たしたい。

報告する土器は、平成4年度調査T21から出土した④。このトレンチでは遺構面精査時と古墳の周溝、石室掘り方から縄文時代の凹石・石鏃・サヌカイト小片、土器小片が出土しており、この土器もSX9210南側周溝の遺構面精査中にみつかった。胎土は密で1㎜弱の黒雲母、石英を多く含み、色調は暗茶褐色を呈している。焼成は比較的良好である。口縁端部に刻み目、内面はナデ調整、外面には区画沈線を上下に2条施している。当遺跡からは、過去に船元II式から宮滝式、突帯文土器が確認されているものの、出土状況が上記のようでありこの土器についても正確な時期は求められない。

浮線網状文土器の特徴として、分布の中心は中部・関東地方に求められるが、同年調査のT13から信州産黒曜石でつくられた五角形鏃が見つかっていることは当遺跡の性格を考えるうえで示唆的であるといえよう。

また浮線網状文土器の当遺跡からの出土はこの1点のみであるが、約1.5km西に下った尼子遺跡からも1点出土している⑤。そこでは浮線網状文と共伴するかたちで、長原式の深鉢、河内産の土器、弥生前期の壺の破片が出土していることが注目できる。



調査地位置図

（大崎　康文）

註

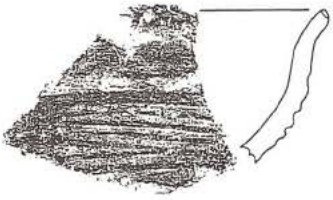
①「北落古墳群」『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書VII－2』（滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化保護協会　1990）
「北落古墳群」『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書VIII－1』（滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化保護協会　1992）

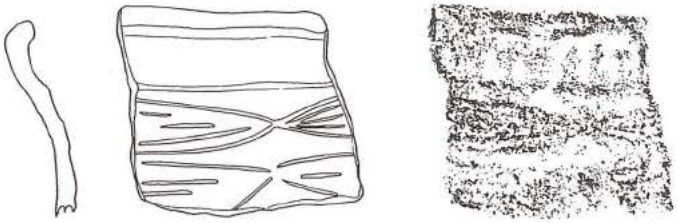
②「北落古墳群Ⅰ」『ほ場整備関係遺構発掘調査報告書ＸＸＩ－4』（滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化保護協会　1994）

③中村健二氏の御指摘による

④②「第12節　T21の調査」

⑤「在士北・尼子南遺跡」『ほ場整備関係遺構発掘調査報告書ＸＸＩ－3』（滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化保護協会　1994）


北落古墳群　T21出土


尼子遺跡　T38　JSK2出土（註⑤より転載）

0　10cm

遺物実測図